

壹 はじめに

真壁城は平安時代の末から戦国時代にかけて、真壁郡周辺を領有していた真壁氏の居城です。平成6年に国史跡の指定を受け、平成9年から発掘調査を行い、その成果に基づいて土塁や園路などの整備工事を行っています。

貳 真壁城概略

真壁城は筑波山系から北西へ伸びる尾根が平地へと至る微高地上に築かれた平城です。北を田中川、南を山口川に挟まれた東西に長い城域で、南北約400m、東西850m、国史跡の指定面積は約12.5haです。現在遺構が良好に残っているのは県道41号線より東側の部分ですが、城はもっと西まで広がっており、大字古城（ふるしろ）の範囲が本来の真壁城域です。

真壁氏が一貫してこの地に居城を築いていたかについては諸説ありますが、発掘調査の成果では15世紀中ごろ（室町時代後半）に方形の館が築かれ、その後幾度かの改変を経て16世紀後半（戦国時代～安土桃山時代）に今の形になったことが分かってきています。

真壁城は本丸の周囲を二の丸・中城が囲み、東側に外曲輪、西側にVの郭が連結した構造となっています。城の西側には城下町が形成され、現在の町並みへと繋がっています。城内には当時の建物などは残っていませんが、土塁や堀などの痕跡が良好に保存されています。

参 真壁氏武将列伝

○初代 真壁長幹（たけもと）〔1159～1223〕

常陸平氏と呼ばれる一族の出身で、平将門の叔父にあたる平国香の子孫、多気直幹（たけなおもと）の子。平安時代の末に当時の真壁郡の郡司職を得てこの地に來たと考えられています。後に源頼朝に臣従を誓い、御家人となりました。

○13代 真壁朝幹（とももと）〔1404～1480〕

真壁氏中興の祖。鎌倉公方足利持氏の軍勢に敗れ、行方不明となった当主秀幹の甥。敗戦後、所領回復に奔走し、親族間の家督争いを乗り越え、いったん没落した真壁氏を再興しました。戦乱の中、辛酸をなめた苦勞人らしく子孫に対し要害（城）を構え油断なく防衛に備えること、兄弟が力を合わせて家を守っていくことなどを説いた置文（遺言状）を残しました。

○17代 真壁久幹（ひさもと）〔1522～1589〕

法名を道無（どうむ）といい、「鬼道無」「夜叉真壁」と恐れられた武将。剣豪・塚原ト伝（つかはらぼくでん）の弟子で戦場に臨むときは周囲八寸（約24cm）、長さ一丈（約3m）余りの筋金入りで鉄鉾をぎっしり打ちつけた赤檜の棒を携え、当たるを幸い人馬もろともなぎ倒すという荒武者でした。一方で、伝来して間もない火縄銃を合戦で用いて小田氏を打ち破るなど軍略にも長けていたと伝えられています。戦国の世、上杉、北条、佐竹の三大勢力の狭間を巧妙な戦略で乗り切り、真壁氏の独立を守りました。

○19代 真壁房幹（ふさもと）〔1569～1612〕

関が原の合戦の後、慶長7（1602）年に佐竹氏家臣として秋田角館へ移り、当地域における真壁氏約400年の歴史を閉じました。大和地区の雨引山楽法寺に真壁城の門を寄進したと伝えられています。